# interview

インタビュー

# 落語家 三**近**亭白鳥

落語家と弁護士。共通点が多いのではないか。とりわけ一般民事(市民法務)に関して言えば、市民を対象としていること、わかりやすい言葉で話をする技術を必要とすること、いわゆる「ボス弁とイソ弁」の師弟関係など。今回は、弁護士会が主催するシンポジウムで落語ショートタイムをこれまで2度も担当していただいた落語家の三遊亭白鳥さんにお話を聞いた。

(聞き手・構成:臼井一廣)

「○○になりたい」と思うだけと,「○○ になる」と決めて行動を起こすことは, 全く違います。まず,動かなければなり ません。そして、縁ですね。



#### 一落語家になろうと思ったきっかけを聞かせてください。

ボクは日本大学芸術学部出身で、将来は小説家になろうかと思っていたんです。しかし、空手部という硬派のところにつかまりまして(笑)。4年生のときに、就職をどうしようかと考えているときに、古本屋で古今亭志ん生師匠の「びんぼう自慢」という本に出会い、貧乏を自慢するなんて、凄いと思ったわけです。そこで、試しに落語家さんに入門しようと思い、まずは寄席に行くようになりました。テレビで、三遊亭円丈(以下「円丈」という)の噺を聴いて、また凄いと思い、電話帳を調べたんです。最初は分からなかったのですが、円丈の住所を知っているおばさんにたどり着いたんです。

# ― 「落語家になりたい」と思えば、誰でも入門できるのでしょうか。

いえ。「○○になりたい」と思うだけと、「○○になる」と決めて行動を起こすことは全く違います。まず、動かなければなりません。そして、縁ですね。つながるときは、つながるものなんです。円丈に「どうしても入門して新作をやりたいなら、(新作を)書いてこい」と言われて、新作を3本書いていったら、円丈が気に入ってくれたんです。

### ――落語界では、お師匠さんが弟子に直接、稽古をつけて くれるものなのでしょうか。

そうです。それと、「この師匠の芸がいいなぁ」と思えば、その偉い師匠に直接、教えてもらえるんです。前座のときは人を通さなくてはいけないのですが、二つ目になれば、自分の判断で直接、お願いできます。しかも、稽古料はとりません。昔から、下の者は上の者から芸を習った。真打ちになった人は、自分もそうやって先輩に稽古をつけてもらったから、後輩に同じように稽古をつけてくれるんです。

#### ──師弟関係は、どんな雰囲気なのですか。

もちろん、その師匠の芸が好きで、その師匠に入門するわけなんですが、結局、人間関係です。その師匠が弟子のことを好きでないと、駄目ですね。みんな落語が好きで好きで入門するわけなんですが、それでもクビになる者もいる。そうかと思えば、私みたいに、なんにも知らないでポワーンといて、「知らないけどいつの間にか、なっちゃった」とかですね。

――なるほど。落語家になるために必要な素養とは何です か。私が白鳥さんの噺を聴いて思ったのは、「声がいい」と

#### いうことなのですが。

「声」というのは場数です。前座の時代から、寄席で、毎日毎日、大きい声を出す。そうすれば、だんだんと良い「声」になっていきます。また、「見た目」や「キャラクター」は、自分で作っていくものです。美男子であるにこしたことはないのですが、やはり、高座に上がったときに「オーラ」というものが出てくるんですよ。見た目が良くなくても、もてる落語家はいっぱいいますよ。

### ――白鳥師匠といえば新作落語ですが、古典落語と新作の 取り組みかたに違いがありますか。

まず、落語家さんが500人いるとして、新作をやっているのは、5人とか、10人とかですね。古典落語ですと、江戸時代から台本があるから「書く」ということは必要なく、あとは「演出」です。この「演出」の「技量」「技術」「貫禄」で名人芸が生まれるのです。一方、新作ですと、何もないところから作っていく。台本を「書く」才能がないと、できない。ただ、古典がキチンとできないといけません。階段を上がってみないと分からない「エッセンス」「引き出し」というものがあるんです。寄席でこの「引き出し」を増やしていくのが大切なんでしょうね。

#### 一寄席で、お客さんのこころを掴む秘訣はありますか。

まずは、「雰囲気」を見る。舞台に立って探りながら 喋っていると、「こういう噺が好きなんだな」と分かる んです。たとえば、ふんぞり返って「取りあえず1時 間、喋れ」というお客さんの場合、はじめから諦める か、それとも、なんとか笑わせようとするかです。

# ――白鳥師匠は、テレビにお出になりません。なにか理由があるのですか。

わたしは「エンタの神様」が大好きで、よく観ます。 ですが、どうでしょう。私が子どものころによくテレビ に出ていて今もよく出ているという人は、多くはない のではないでしょうか。私たちの世界は息の長い世界 だと思っています。売れるまでに時間がかかるが、売 れてからも長いと。

### ――テレビに出れば宣伝効果があると思いますが、テレビ にはお出にならない白鳥師匠の場合、仕事の依頼はどうや ってくるのでしょうか。

やはり口コミです。「あいつは面白いよ」ということ であれば、「じゃあ、1回、呼んでみるか」となります。



プロフィール さんゆうてい・はくちょう

1963年新潟県上越市生まれ。日本大学芸術学部文芸学科卒業。1987年 三遊亭円丈に入門(三遊亭にいがた), 1990年二つ目に昇進(三遊亭新潟), 2001年9月真打に昇進,三遊亭白鳥となる。独特の古典落語からオリジナ ルの新作落語まで幅広く活動。特に新作落語は自分で創作, 100本以上の作 品があり, 落語界で注目されている。明るくパワフルな芸風。趣味は南の島へ の放浪, 今まで30カ所以上の海外, 国内の島を巡り歩く。

それと, インターネットですね。インターネット, ホームページを見た人から, メールで仕事の依頼を受ける場合もあります。

#### ----弁護士に対して、どんなイメージを持っていますか。

弁護士に相談したことはありませんが、「頭が良くて」「お金を稼いで」「権力があって」「悠々自適で」「ステータスがあって」……。

## ――そういう人もいますが(笑)。なにぶん、弁護士は、全国で2万2000人もいますから。

僕らの世界みたいに、「売れてる人」と「そうでない 人」がいるわけですね(笑)。

### ――裁判員制度の導入を控え、弁護士も「話し方」に工夫 をするべきだという考えが広がっています。話のプロとし て、なにかアドバイスはありますか。

とにかく声を出して練習をすることです。それと、「これを話すぞ」とあらかじめ決めておいたことをそのまま話そうとするのではなく、相手の反応を見ながら話す内容を変えるとよいのではないでしょうか。

#### ――もし白鳥さんが裁判員に選ばれたら, どうしますか。

もちろん,喜んで参加します。そして,新作落語の ネタにしますよ(笑)。

#### ---どうもありがとうございました。